

日蓮大聖人・日興上人・日目上人に関する年表

＜聖壽・興壽・目壽等の年齢は数え表記としました＞

古来、中国仏教では「周書異記」を根拠に周の昭王2年（BC1029）4月8日～周の穆王52年（BC949）2月15日迄の80歳を釈尊の生涯と考えます。天台大師智顛・伝教大師最澄等々平安時代、鎌倉時代の諸師も、中国仏教の考え方を踏襲し、日本仏教が出来上がっているのです、日蓮大聖人も、この説を取ります。

BC949年		釈尊入滅
正法時代 1000年 (AD51年迄)		釈尊が生きているかのように釈尊を中心とした仏教（小乗教の戒律重視）の信心修行に励むことによって悟りが得られると考えられた。釈尊が亡くなった時代のインドのサンスクリット語では、釈尊の説法の詳細な機微を表現するだけの語彙が無かった為、文字化せず、正法時代 1000年間は各教典を分担し口伝によって次代に継承していった。その編纂の中心責任者を【付法蔵の24人】と言う。1000年を24人で分割すると、一人約41年の担当となる。像法の時代に移りサンスクリット語も熟成し語彙が豊富になり、文字化された経典となっていく。
像法時代 1000年 (52年～1051年)		像法の像は影の意で、正法時代の釈尊が存在していないけれども正しく生きているかのように信心修行する時代を受け、踏襲して、やはり釈尊中心の釈尊の影を慕う信心修行の時代が像法時代 1000年である。
末法万年時代 (1052年～永遠)		釈尊在世の時代から一番離れた時代。国土もインドから一番離れた東北丑寅東夷日本という国。釈尊が存在していたこと自体に疑い不信、否定をする人間が大半を越え増加し、教えの道理も疑い不信、否定する状況が増加しても減少する事無い時代。この時代は釈尊に対する尊敬思慕の念から起こる釈尊本尊の信心修行では無く、釈尊の悟った法を根本とする信心修行にしなければ末法は一切衆生は一切の諸仏諸菩薩と平等に成仏する事が出来ない。仏を本尊にするのではなく、仏の中味である法を本尊とする事を、日蓮大聖人だけが示されたのである。
538年		日本へ仏教が朝廷を経て正式伝来
538年～597年		天台大師智顛の生涯
688年～763年		鑑真の生涯
754年天平勝宝6年		鑑真東大寺大仏殿前に小乗戒壇設置
767年～822年		伝教大師最澄の生涯
827年		延暦寺に大乘（迹門）戒壇建立
774年～835年		弘法大師空海の生涯
1133年～1212年		法然の生涯
1173年～1262年		親鸞の生涯
1185年【元暦2年】		鎌倉幕府成立
1192年【建久3年】	7月12日	源頼朝 征夷大將軍に就任
1221年【承久3年】	5月	承久の乱
	7月13日	後鳥羽上皇 島根県隠岐の島へ流罪
	7月21日	順徳天皇 新潟県佐渡島へ流罪
		日昭 下総海上郡に生まれる
1222年【承久4年】	2月16日	日蓮 下総安房片海に、漁師父三国の大夫 母梅菊の間に生まれる 幼名善日麿 末法に入って170年目
1223年【貞応2年】	5月	土御門上皇 高知県土佐に自ら趣く
1232年【貞永元年】	8月	鎌倉幕府、貞永式目を制定
1233年【天福元年】	5月12日	聖壽12歳 日蓮 天台宗安房清澄寺に登る

1237年【嘉禎3年】	10月8日	聖壽16歳 日蓮 清澄寺に於いて、道善房を師匠とし得度 是正房蓮長と号す
1238年～1242年 嘉禎4年～仁治3年		聖壽17歳～21歳 日蓮 鎌倉遊学
1238年【嘉禎4年】	11月14日	聖壽17歳 日蓮、【円多羅義集】を书写
1242年【仁治3年】		聖壽21歳 日蓮 一旦清澄寺に帰り【戒体即身成仏義】を著し、再び鎌倉遊学から叡山横川を中心として、京都、奈良、高野、大阪等々各宗各派の教義、修行遊学
1245年【寛元3年】	4月8日	聖壽24歳 日郎 下総海上郡に誕生（師匠日昭は伯父）
1246年【寛元4年】	3月8日	聖壽25歳 興壽1歳 日興 甲斐鯉沢に誕生 父大井橋六母妙福
1247年【宝治元年】		聖壽26歳 日蓮 奈良薬師寺で大蔵經を閲覽する
	6月5日	【宝治の合戦】北条時頼 三浦泰村とその一族を滅ぼす
1248年【宝治2年】		聖壽27歳 日蓮 高野山を訪ねる
1250年【建長2年】		聖壽29歳 日持 駿河松野に誕生
		日蓮 四天王寺を訪ねる
1252年【建長4年】		聖壽31歳 日頂 駿河重須に誕生
1253年【建長5年】	2月16日	聖壽32歳 日向 上総に誕生
	4月28日	これからの人生を法華經の行者として生きる為、出家時の道号、蓮長を師匠に返上し、自ら、神力品「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如くの人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」から【日】を、涌出品「世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し地より涌出す」より自解仏乗として【日蓮】と自ら名付け名乗る ※1
	5月	日蓮 鎌倉名越に草庵を構え、辻説法を行い人々に一切衆生成仏の法は唯一法華經であり、世の中の平和も法華經によって叶う 鎌倉幕府は信仰が間違っている為に世の中の乱れを招いている事を訴える
	8月28日	道元 死去 54歳
	11月	天台僧成弁（日昭）松葉谷草庵にて日蓮の弟子として出家し直す 33歳

※1 立教開宗は、

3月説「波木井殿御書（真偽未詳）」「御伝土代」「御義口伝」「安国論問答」

4月説「聖人御難事」「諫曉八幡抄」「清澄寺大衆中」「大白牛車書」「中興入道御消息」「御義口伝」があるが、3月の頃より道善房の持仏堂に籠り、諸宗の依經と現実を精査確認し、一切衆生成仏の法は法華經のみであることを確信し、法華經の行者として生きる覚悟を固められた。師匠、兄弟弟子、故郷の人々に無用な混乱を生じさせないよう時間をかけ、師匠、兄弟弟子に4月28日にどのような説法をするのかを事前に詳細に説明説得し4月28日を迎え、嵩ヶ森の山頂に於いて南無妙法蓮華經の御題目を唱える。4月28日立宗宣言以後東条景信の追跡から、師匠、兄弟弟子が、守り、かくまい、鎌倉への道を開いた事でも、日蓮を理解していたことが分かる。浄願、義浄に於いては日蓮の兄弟であり乍ら、日蓮を尊敬し弟子の如き振舞であります。阿部日頭が突然3月28日は内証の宣言、4月28日は外用の宣言という過去歴代も示していない前代未聞の説を立てたが、不毛の理屈で何の意味も無い。建長5年4月28日を「宗旨建立」と呼称する人々が日蓮正宗の中に大勢いますが、この時点は、法華經の行者としての旅立ちであるので、あくまでも「立教開宗」であります。まだ法華經の行者として法華經身誦の大難は受けていません。国家諫曉もしていません。御本尊の建立も龍ノ口法難を機縁とする、發迹顕本、人法一箇、末法本佛の自覚。熱原法難を機縁とする師弟一箇、一切衆生成仏の法の確認、戒壇本尊建立されていませんから、宗旨は建立されていません。宗旨の建立と呼称する者は、信仰の根本（宗旨）、何を以って成仏を遂げるのかが混乱しているのがあります。

【宗旨建立】は熱原法難中の弘安2年10月1日であります。

鎌倉へ向かう途上、実家に立ち寄り両親は手を擦り合わせて物騒な事を言うなするなど懇願されますが、順々と折伏し両親は法華經の信仰者となります。

「四箇の格言（念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊）」もここでされたと示されたとしている年表を鵜呑みにして理解している人々が大勢いますが、この時点では、念仏宗、禪宗批判が中心で、真言批判はされていません。四箇の格言は、1253年建長5年4月28日この時点ではありません。加えて天台宗批判もされていません。この点からも宗旨建立ではありません。

【破良観等御書】(全 1293 p)「年三十二建長五年の春の比より念仏宗と禅宗等とをせめはじめて後に真言宗等をせむるほどに」

1254年【建長6年】		聖壽33歳 富木常忍 入信
1256年【建長8年】		聖壽35歳 南条兵衛七郎、四条頼基、進士善春、工藤吉隆、池上宗仲、荏原義宗等々入信
	7月17日	北条時頼 鎌倉最明寺を開く
	11月23日	北条時頼 最明寺にて出家
1257年【康元2年】 【正嘉元年】	2月10日	聖壽36歳 鎌倉幕府太政官庁焼失
	5月	鎌倉大地震
	8月23日	鎌倉大地震 神社仏閣、人家崩壊、山崩れ、地割れ、水涌き、地割れから炎、壊滅状態。9月4日まで休みなく余震
1258年【正嘉2年】	2月14日	聖壽37歳 日蓮父、妙日逝去
	2月	正嘉の大地震を機縁に「立正安国論」起草の為、岩本実相寺に、一切経を閲覧
		日興 四十九院にて出家し修行中、実相寺にて日蓮の説法に接し日蓮の弟子として出家し直し入門 興壽12歳
1259年【正嘉3年】		聖壽38歳 南条時光誕生
1260年【文応元年】		聖壽39歳 曾谷教信、秋元太郎、太田乗明等々入信
	4月28日	日目 伊豆仁田郡島郷に誕生 父新田五郎重綱、母蓮阿尼
	5月28日	【唱法華題目抄】著
	7月16日	【立正安国論】(第一回国家諫暁高名)を著し、6代執権は北条長時だが政治の実権を握っている北条時頼(最明寺入道)に宿屋左衛門入道を経て諫暁
	8月27日	『松葉谷法難』
		富木常忍の邸に避難、寄宿し、法華堂に於いて百日説法を行う
1261年【弘長元年】	5月12日	聖壽40歳 日蓮『伊豆伊東流罪』日興常随給仕 興壽16歳
		船守弥三郎夫妻入信、外護給仕に努める
1263年【弘長3年】	2月22日	聖壽42歳 日蓮赦免され鎌倉へ帰る
1264年【文永元年】	秋	聖壽43歳 母妙蓮重篤の知らせを受け片海へ帰り、病氣平癒を祈る建長5年4月28日以来古里の人々に直接法を説いていないため精力的に折伏弘教、指導に巡る
	11月11日	申西の刻『小松原法難』安房東条小松原にて、地頭東条景信の軍勢と念仏者に襲われ頭に刃傷、左手骨折。鏡忍房、天津領主工藤吉隆殉死、乗観、長英、疵を被る
	11月14日	師匠道善房と蓮華寺にて再会、今迄に阿弥陀仏5体作れば5度地獄に堕ちると謗法の念仏信仰に対する執着を捨てるよう破折
1265年【文永2年】	3月8日	聖壽44歳 南条兵衛七郎(行増)死去 日蓮、南条兵衛七郎の墓へ詣でる 南条時光7歳
1267年【文永4年】	8月15日	聖壽46歳 日蓮鎌倉に在り 母妙蓮逝去
1268年【文永5年】	1月18日	聖壽47歳 蒙古使節大宰府を訪ね通交を要求
	2月19日	朝議の結果通交拒否
	3月5日	北条時宗8代執権となる
	4月5日	【安国論御勘由来】著す
	8月21日	9年振りに再執筆した【立正安国論】を諫言書(御会式時の日蓮申状)を添え宿屋左衛門入道を経て幕府へ再提出
	10月11日	11通諫状を北条時宗、平左衛門尉頼綱、極楽寺良観等々へ送り公場対決を求める
1269年【文永6年】	3月7日	聖壽48歳 蒙古使節、対馬上陸、返書を要求、島民を拉致し帰国

	9月17日	高麗の使者、対馬上陸、島民を返し、国書を送る
1270年【文永7年】	1月11日	聖壽49歳 蒙古船、対馬上陸
1271年【文永8年】	6月	極楽寺良観、鎌倉幕府の願いにより祈雨を修す
	9月10日	聖壽50歳 問注所へ呼び出され平左衛門尉頼綱に尋問される この時改めて国家を上げて法華経の信仰をすることを諫言（第2回目の諫暁高名）
	9月	蒙古使者（趙良弼）筑前に上陸
	9月12日	『龍ノ口法難』 ※2
	9月	日朗等5人土牢に投獄される
	10月9日	南無妙法蓮華経首題、不動明王、愛染明王、文永八年太才辛未十月九日、日蓮花押だけの本尊を初めて顕す
	10月10日	依智出発、佐渡へ（1ヶ月間の連日の評定を経て、自分達が手を下して殺す事が出来ないが、日蓮には死んで貰いたい。ならば過酷な自然の流刑地で衰弱し病死すれば祟りを被る事は無いと考え、幕府は佐渡流罪を決定した）
	10月21日	越後寺泊着
	10月28日	佐渡着
	11月1日	塚原三昧堂へ入る（佐渡熊野町古来からの共同墓地地域が該当、日蓮宗 塚原山 根本寺は三昧堂跡ではありません。）
		阿仏房千日尼入信

※2 龍ノ口法難

松葉谷草庵急襲（午後4時頃）。平左衛門尉頼綱、軍を率いて松葉谷草庵を襲い暴れ回った上で日蓮を捕縛、鎌倉市中を晒しものとした後、北条宣時の邸に深夜まで軟禁し丑寅の刻、市中に人の眼が完全に無くなる時刻を待ち、龍ノ口刑場へ連行し法の裁きをせず暗殺しようとする。北条宣時邸の下女中が、日蓮大聖人が龍ノ口処刑場に向かうとは想わず、丑の刻の早い旅立ちと思い、日蓮大聖人に心尽くしの道中弁当のおむすびを作り手渡そうとした折に、すべり落ち、地面に転がり砂だらけになったというエピソードから、古来、龍ノ口法難法要の御宝前に、砂だらけを模して、黒ゴマまぶしのぼた餅を供え、参詣者にふるまい、別名ぼた餅御講と称する。連行の途中、鶴岡八幡宮から延びる都大路に差し掛かり馬を降り、闇の中北に向かい鶴岡八幡宮に、法華経の行者守護の任を、忘れずまっとうするよう諫める。四条金吾邸に使いを出し事の顛末を伝える。急ぎ四条金吾兄弟四人駆けつけ、龍ノ口まで同道。四条金吾は日蓮大聖人斬首の瞬間に追い腹切って果てようとし、日蓮大聖人から強く戒められる。

斬首の瞬間に江の島の方より（辰巳<南東>から戌亥<北西>）低い光跡の流星が走り、処刑に関わる武士も平左衛門尉自身も祟りを恐れ、処刑を中止。依智の本間六郎左衛門の邸に処分決定まで軟禁預かりとなる「佐渡以前の事は 仏の爾前経と思召せ」と示し、法華経の行者として法華経身読、上行菩薩の自覚を踏まえ、末法の本佛の自覚を持つ

1272年【文永9年】	1月16日	聖壽51歳 塚原三昧堂にて諸宗の僧等と問答、論破
		本間六郎左衛門尉に自界叛逆を予言、すぐさま鎌倉に駆け付けるよう進言
	2月	【開目抄】著
	2月	『二月騒動』（反乱の嫌疑をかけられ）
	2月11日	北条教時、時章誅殺
	2月15日	北条時輔 時頼長男（時宗は異母弟）誅殺
	4月	一谷へ移る
		一谷入道（中興次郎入道）子息信重（中興入道）入信
	5月	元の使者（趙良弼）の使者、高麗の牒状を預かり来る
		四条金吾、佐渡へ詣でる
		日妙子供を連れ佐渡へ詣でる

1273年【文永10年】	9月	日目走湯山に登り出家13歳
	3月	元の使者(趙良弼)大宰府に上陸
	4月25日	聖壽52歳 【如来滅後五五百歳始観心本尊抄】著 翌日富木入道へ送る
	7月8日	佐渡始頭本尊願わす
	8月15日	【経王殿御返事】(全1124p)「日蓮がたましいをすみにそめながして書いて候ぞ信じさせ給え、仏の御意は法華経なり日蓮がたましいは南無妙法蓮華経にすぎたるはなし」戒壇本尊を願す七年前(文永10年8月15日)の手紙であり、戒壇本尊だけが日蓮の魂では無い事と、全て本尊は日蓮が魂、南無妙法蓮華経(久遠元初、本因妙、一念三千の法)を示す為であり、釈迦如来の本懐(法華経)と違う事が了解出来る
	12月7日	北条宣時、偽御教書を出し、日蓮の外護を禁ず
1274年【文永11年】	2月14日	聖壽53歳 幕府 日蓮の赦免状発布
	3月8日	日蓮 赦免状佐渡に着く
	3月13日	日蓮 一谷を鎌倉に向け立つ
	3月14日	真浦滞留
	3月16日	越後柏崎上陸
	3月26日	鎌倉着
	4月8日	平左衛門尉頼綱に見参、蒙古来襲はいつか尋問される 国として法華経の信仰をしなければ国の安穩は無いと訴える(第三回国家諫暁高名)
	5月12日	身延山に向かい鎌倉を出発
	5月17日	身延入山
	5月	【法華取要抄】著
	10月5日	『文永の役』蒙古・高麗兵3万、船900隻対馬に来襲
	10月20日	蒙古兵、筑前に上陸、夜半大風の為蒙古船200隻余り沈没
	11月1日	幕府に蒙古襲来の報告届く
	11月	日興伊豆山田蔵坊を訪ね学匠式部僧都と問答し、日目上人15歳を改心させ日興より、日目授戒を受け、弟子とし身延の日蓮大聖人に引き合わせる これより日蓮に採果汲水、拾薪設食、常随給仕 午前午後一日二度の講義一度も欠かすことなし
1275年【建治元年】	4月15日	聖壽54歳 蒙古使者(杜世忠等)長門室津上陸、その後鎌倉に召さる
	6月	【撰時抄】著
		日興教化によって熱原龍泉寺、下野房日秀、越後房日弁、少輔房日禅、三河房頼円、在家信者多数帰依。龍泉寺大衆多数の改宗により、迫害が始まる 熱原法難の顕在化の始まり
1276年【建治2年】	9月7日	幕府、蒙古使者(杜世忠等)を龍ノ口にて殺害
	2月15日	聖壽55歳 船守弥三郎死去
	3月16日	道善房死去
		龍泉寺院主代行智、下野房日秀、越後房日弁、少輔房日禅、三河房頼円に称名念仏の誓状提出を求める。頼円は受諾。これにより日禅は河合へ移り、日秀、日弁は寺中に居座り弘教を続ける
	3月	池上宗仲、父に勘当される
	3月30日	富木入道、母の御骨を納骨
1277年【建治3年】	7月21日	【報恩抄】著
	4月10日	聖壽56歳 【四信五品抄】著
	6月9日	三位房、鎌倉桑谷にて竜象房と問答『桑谷問答』

		竜象房の、四条金吾が刀をチラつかせたので危険を感じ問答に負けたとの弁解が問題となり主君江間入道より閉門蟄居、所領召し上げとなる
	6月25日	日蓮、四条金吾に代わって無実を訴える【頼基陳情】著
	6月	【下山御消息】著
		池上宗仲、再び勘当される
	10月末	大進房退転
	12月	年の瀬より冷えの病から来る、下り腹（下痢）痩せ病（胃腸障害）重く弘安5年の入滅迄持病となり慢性的に患う
1278年【建治4年】 【弘安元年】	2月	聖壽57歳 【立正安国論廣本】著 建治4年2月改元弘安元年双方に交わり著
	6月	四条金吾調合の薬で小康を得る
	6月25日	【日女御前御返事】（全1245p）より、花押がバン字からボロン字へ変化。本尊の花押も同様に変化定着
		四条金吾、主君江間入道の病を直す事により、誤解が解け、信頼を得、加増
		阿仏房身延に詣でる
	9月	【本尊問答抄】著
		仏滅後二千二百二十八年目 弘安元年より御本尊に二千二百三十余年と書き始める2年前倒し
1279年【弘安2年】	3月21日	聖壽58歳 阿仏房、佐渡にて死去
	4月8日	熱原信徒、四郎、浅間神社分社にて暴漢に襲われ傷害を受ける
	7月29日	元の使者、筑紫に上陸、幕府に書状を届ける。幕府属国要求を拒否し、元の使者を博多にて殺害
	8月	熱原信徒、弥四郎、暴漢に襲われ殺害される
	9月21日	熱原信徒、院主の田の稲刈りをし盗んだとの事実無根の内容の告訴状を作り神四郎、弥五郎、弥次郎はじめ20人を捕縛し鎌倉へ連行、土牢に入れる。
	10月1日	【聖人御難事】著 熱原信徒の信仰を貫く姿の報告を受け、日蓮と生まれも育ちも、出家在家の違いも、修行も、経験も、学問も、数々の受難も、全く違うにもかかわらず、同じ南無妙法蓮華經の生き方を貫く事に於いて同等であることを身延に於いて見聞し、師弟一箇、一切衆生成仏を確認確信し、「余は二十七年なり」と建長五年四月二十八日から数えて二十七年かかって、ここに出世の本懐（宗旨建立）を明示する。この感得された内証が全ての本尊の中味
	10月12日	伝、戒壇本尊顕す ※3
10月15日	神四郎、弥五郎、弥次郎（弥六郎は間違い）を裁きにかけることもなく、平左衛門尉頼綱の私邸において、法華經の信仰を止め、念仏を唱えれば命を助けてやると迫り、墓目矢で骨を打ち砕く拷問の末、南無妙法蓮華經の唱題を貫き、神四郎、弥五郎、弥次郎は殺害され、17人は処払い、浪々の身とされる	

※3 戒壇本尊の腰書き（台座に差し込む鞘の部分）に、右為現當二世造○如件 本門戒壇之 願主 弥四郎国重 法華講衆等 敬白 弘安二年十月十二日と書かれてあり、日蓮大聖人の筆ではない。大石寺 14 世日主上人の書き写し文書のみで、写真は一切公表されていない。戒壇本尊自体には讚文も日付も無い。元来、戒壇は授戒の場という意味だが、戒壇本尊の前で御授戒はしないので、伝教大師の迹門の戒壇との対比で本門の戒壇という名称で呼ばれる様になったのであろう。元々【弘安2年の本尊】と称されていた。願主弥四郎国重の名前も歴史の中に皆無。北山本門寺所蔵の日禪授与の本尊に酷似している事実は覆せない。【弘安2年の本尊】が戦国時代の混乱によって盗まれたり、灰塵に帰して、現在存在していなくても、弘安2年10月1日日蓮大聖人と熱原信徒の師弟一箇の出世の本懐（宗旨）が立てられた事実に何の遜色も無い。戒壇本尊こそが、戒壇本尊だけが、法だと、成住壊空の物体を永遠常住の法だと強弁する大石寺の信仰のあり方が謗法と化している。

1280年【弘安3年】	11月14日	聖壽59歳 鶴岡八幡宮炎上	
1281年【弘安4年】	5月21日	聖壽60歳 『弘安の役』高麗兵船500艘余り、壱岐、対馬を襲う	
	6月6日	元、高麗兵、志賀島等に来襲	
	6月16日	日蓮、蒙古襲来につき、門下一同に言動を慎むよう指示	
		日興、天奏	
	7月1日	元の船、大風で沈没、大敗す	
	7月	藤九郎守綱、父阿仏房の遺骨を身延に納骨の為詣でる	
	11月24日	身延山に十間四面の堂を建立	
1282年【弘安5年】	9月8日	聖壽61歳 常陸の湯に向かい身延出立	
	9月18日	衰弱著しい為、池上宗仲邸に恢復の為立ち寄る	
	9月	日蓮の代理で日目伊勢法印と法論、論破	
	10月8日	日蓮、本弟子6人を選定 日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持	
	10月13日	日蓮、辰の刻（午前7時～9時）入滅。戌の刻（午後19時～21時）入棺	
	10月14日	日蓮葬送、子の刻（午前11時～午後13時）	
	10月16日	日興【宗祖御遷化記録】著	
	10月21日	日興、日目、日蓮の遺骨を奉じ、池上邸を出発	
	10月25日	日興、日目、身延帰山	
	1283年【弘安6年】	1月	興壽38歳目壽24歳 日興【墓所可守番帳事】著 一月日昭、二月日朗、三月越前坊（実名不明）・日賢、四月日頂、五月日持、六月日弁、日秀、七月日世・筑前公（実名不明）、八月日法・日延、九月日興、十月但馬公・日目、十一月日向、十二月日秀・日華
		日道、伊豆国島郷に誕生	
		日目、三ノ迫新田に上新田坊（本源寺）開く	
		日目、三ノ迫柏木に法華堂（上行寺）開く	
10月13日		日蓮大聖人壱周忌	
1284年【弘安7年】		4月4日	興壽39歳目壽25歳 北条時宗死去
5月10日		南条時光母妙法死去	
10月12日	富木常忍、日蓮大聖人の第三回忌の約束の日時に、折伏の状況となった事を理由に身延に到着しなかった為、日頂を勘当		
10月13日	日蓮大聖人第三回忌		
12月	日昭、鎌倉に妙法華寺を開く		
1285年【弘安8年】	4月	興壽40歳目壽26歳 日昭、天台沙門と名乗り幕府に申状を奉る	
	11月17日	『霜月騒動』（秋田城介の乱）縁戚関係にある有力御家人、安達泰盛の一族が、9代執権北条貞時により滅ぼされる。安達泰盛と平左衛門尉頼綱との政治主導権争い。これにより北条家の独裁体制が確立。	
		日興『霜月騒動』に呼応して幕府と朝廷双方に申状を奉る	
		日目、日興の命により、この年から元徳2年に至るまで、度々奏聞する	
		日朗、天台沙門と名乗り幕府へ申状を奉る	
		日向、身延に登り、日興より学頭に任ぜられる	
1286年【弘安9年】		興壽41歳目壽27歳 日向に謗法行為現れる	

1287年【弘安10年】		興壽42歳目壽28歳 日目、一ノ迫柳ノ目に法華堂開く
1288年【正応元年】	4月8日	興壽43歳目壽29歳 日向、釈尊絵曼荼羅を絵師に画かせる
	6月8日	日持、日浄日蓮大聖人第七回忌報恩の御影を造立
	10月13日	日蓮大聖人第七回忌
	12月16日	日興、原殿（波木実長の一族で、原の御牧地域に住していた）へ、【原殿御返事】を送る。鎌倉方面の日蓮門下の謗法と日向、波木実長の謗法を責め、身延を離山しなければいけない苦渋と、どの地でも謗法厳戒の信仰を貫き流布する志を示す。「身延の沢を罷り出で候事面目なさ本意なさ申し尽くし難く候えども打ち還し案じ候えばいづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候わん事こそ詮にて候え さりとともと思ひ奉るに御弟子悉く師敵対せられ候いぬ 日興一人本師の正義を御存じて本懐を遂げ奉り候べき仁に相当って覚え候えば本意忘ること無くて候」（聖典560p）
1289年【正応2年】	1月	興壽44歳目壽30歳 日興、鎌倉幕府へ申状を奉ずる
	春	日興、日目等、身延離山
		日興、南条家下屋敷に下之坊を開く
	10月	日興、大石ヶ原に寺院建立を始める
1290年【正応3年】		興壽45歳目壽31歳 日目、大石寺塔中蓮蔵坊を開く
		日華、大石寺塔中寂日坊を開く
		日秀、大石寺塔中理境坊を開く
		日禅、大石寺塔中南之坊を開く
		日仙、大石寺塔中上蓮坊（後の百貫坊）を開く
1291年【正応4年】	3月	興壽46歳目壽32歳 日頂、天台沙門と名乗り幕府に申状を奉ずる
	10月7日	日興、上野本応寺を開く
1293年【永仁元年】	4月22日	興壽48歳目壽34歳 『平禅門の変』執権北条貞時、謀叛の疑いをかけ平左衛門頼綱、次子資宗親子を斬殺し、長子宗綱を佐渡流罪、一族滅亡。熱原法難から14年
	5月16日	越後房日弁、申状を捧ぐ
	9月13日	池上宗仲死去
	11月11日	甲斐下山兵庫光基死去
1294年【永仁2年】	5月1日	興壽49歳目壽35歳 曾谷入道法蓮死去
	10月13日	日蓮大聖人第13回忌
1295年【永仁3年】	1月1日	興壽50歳目壽36歳 日持、海外布教に出る
		三河公日蔵、大石寺塔中蓮東坊を開く
1296年【永仁4年】		興壽51歳目壽37歳 了性房日乗、大石寺塔中蓮仙坊を開く
		日目、京都において北条宗宣と問答
1297年【永仁5年】	7月10日	興壽52歳目壽38歳 北条宗宣、南六波羅探題に就任
	9月25日	波木井実長日円死去76歳
1298年【永仁6年】	2月15日	興壽53歳目壽39歳 日興、重須に御影堂を建立
	10月13日	日蓮大聖人第17回忌
		日興【白蓮弟子分与申御筆御本尊目録事】著す ここに本弟子六人を定める。日目六人の一人に指定
		日興、日目に大石寺を任せ、重須に移住

1299年【正安元年】	1月13日	興壽54歳目壽40歳 日興【神天上勘文】著す
	3月20日	富木日常死去
	6月30日	日目へ十宗房との問答を認める御教書下さる
	7月1日	日目、十宗房と問答、論破
	秋	日興、太夫日尊を勘当
		日道、日運、日目の弟子として得度
		越後房日弁、大石寺塔中乗観坊を開く
1300年【正安2年】	3月15日	興壽55歳目壽41歳 四条金吾頼基死去71歳
		寂仙房日澄、日向と義絶し、日興に帰伏、弟子となる
1301年【正安3年】	8月13日	興壽56歳目壽42歳 日道、重須に行泉坊を開く
1302年【乾元元年】	3月8日	興壽57歳目壽43歳 日頂、大石寺、重須に参詣
	8月14日	千日尼死去
1303年【嘉元元年】	3月15日	興壽58歳目壽44歳 四条金吾妻、日眼女死去
	3月	日頂、重須に正林寺開く
	7月12日	極楽寺良観（忍性）死去87歳
	11月1日	富木日常尼重須にて死去
1304年【嘉元2年】	5月	興壽59歳目壽45歳 日興、申し状を書く
	8月13日	日興、寂日房日澄を重須学頭に任ずる
	10月13日	日蓮大聖人第二十三回忌
1307年【徳治2年】	春	興壽62歳目壽48歳 『徳治法難』信徒迫害につき、幕府に出訴
1308年【延慶元年】		興壽63歳目壽49歳 日尊、京都に法華堂（後の要法寺）を開く
		日目、日興の代理で鎌倉での訴訟に対処
	5月20日	竜華院日像、御教書下され、京より追放される
1309年【延慶2年】	2月23日	興壽64歳目壽50歳 南条時光、時忠に家督を譲る
		伝、日興の命により寂仙房日澄が記録したとする【富士一跡門徒存知事】著
1310年【延慶3年】	3月14日	興壽65歳目壽51歳 重須学頭寂仙房日澄死去
1313年【正和2年】	12月24日	興壽68歳目壽54歳 南部弥六郎長義死去
		日向、身延より上総藻原へ移る
1314年【正和3年】	9月3日	興壽69歳目壽55歳 民部日向死去
	10月13日	日蓮大聖人第三十三回忌
1319年【元応元年】		興壽74歳目壽60歳 伊勢公日円、大石寺塔中観行坊を開く
1321年【元亨元年】		興壽76歳目壽62歳 治部公日延、大石寺塔中治部坊（本境坊）を開く
1322年【元亨2年】	3月23日	興壽77歳目壽63歳 南条時光、妹妙華（中之御前）死去
1323年【元亨3年】	3月26日	興壽78歳目壽64歳 日昭、鎌倉浜土にて死去
	8月13日	南条時光妻、妙蓮死去
1324年【正中元年】	3月	興壽79歳目壽65歳 南条時光、富士上野郷堀之内を日華に寄せ妙蓮寺を開く
1325年【正中2年】	11月13日	興壽80歳目壽66歳 石川妙源、重須御影堂寄進の置状を日興に奉呈

1327年【嘉暦2年】	8月	興壽82歳目壽68歳 日興、申状を書す
	11月17日	日興、鎌倉幕府へ申状を書す
1328年【嘉暦3年】	9月15日	興壽83歳目壽69歳 重須開基檀那、石川孫三郎源能忠死去
1330年【元徳2年】	2月24日	興壽85歳目壽71歳 日興母妙福、駿河河合にて死去
	3月	日興、鎌倉幕府への申状を書く（御会式時奉読の申し状）
1331年【元弘元年】		興壽86歳目壽72歳 日道、大石寺塔中浄蓮坊を開く
	10月13日	日蓮大聖人第50回忌
1332年【元弘2年】	5月1日	興壽87歳目壽73歳 南条時光死去74歳
	11月10日	【日興跡條々事】著す
1333年【正慶2年】 (北朝正慶)	1月13日	日興【遺誠置文二十六箇条】を定める
	2月7日	興壽88歳目壽74歳 日興、重須にて御遷化88歳
	2月8日	西の刻（午後5時～7時）入棺、戌（午後7時～9時）の刻葬送
		日目、葬送に参列し後塵を勤め、遺物として太刀を賜う
		重須に墓を建立納骨
		保田日郷【日興上人御遷化次第及び御遺物配分の事】を記す
	2月13日	日目、日興上人の初七日を修す。同日、日仙、日助と共に【日興上人御遺跡事】を記録
	5月22日	北条氏滅亡
	6月	建武の新政（中興）後醍醐天皇、鎌倉幕府を倒し隠岐を脱出し伯耆に住し、幕府滅亡を画策し幕府滅亡後京都に帰還。翌年建武と改元。足利尊氏と対立し、僅か二年で崩壊。南北朝時代を迎える
	11月15日	日目、天奏途上、美濃垂井にて御遷化74歳
		目壽74歳 生涯42度の国家諫暁（7度は日蓮、日興の代理、自身申状は35度。日興上人が重須に移り大石寺を任されてから35年、毎年国家諫暁された）
		日尊が代参、日郷遺骨を奉じ帰山
		下之坊に墓を建立納骨 日道、日郷論争、以後70余年の係争起こる
	日道【御伝土代】著	
1336年【建武3年】	12月	南朝北朝分裂
1338年【建武5年】	5月5日	東坊地係争起こる「日郷宛寄進状」
1551年【天文20年】		末法時代に入って初めての500年が終わる（大石寺貫主13世日院）